

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
文化動態研究ユニット公開研究会
「行動論からの心身論へのアプローチ」報告
2009年1月6日

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・文化動態研究ユニットは、公開研究会「行動論からの心身論へのアプローチ」を開催した。今回は、身体と行動をめぐるユニークな研究で知られるお二人の講師の方にお越しいただき、語る、さわる、示す、動かす、といった行動の数かずを切り口として、心身論へのアプローチを試みた。二件の発表の後、両方をクロスさせる形での自由討論が行われた。(亀井)

■日時

2008年12月14日(日)14:00-18:00

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階301号室

■プログラム

(1) 発題1: 細馬宏通(滋賀県立大学)

「体験を語る身体: 観察者の視点と体験者の視点」

(2) 発題2: 広瀬浩二郎(国立民族学博物館)

『手学問のすゝめ』の誕生: "さわる"体験型ワークショップがめざすフリーバリア社会」

(3) 全体討論

司会: 亀井伸孝(AA研)

■報告概要

□発題1: 細馬宏通(滋賀県立大学)

「体験を語る身体: 観察者の視点と体験者の視点」

当日は、日常会話で行われるジェスチャーを題材に、人の身体が発声とともにいかに我知らず動くかについてさまざまな事例をもとに紹介した。

いつもやるジェスチャー研究の発表と違っていたのは、その場に広瀬さんがおられたことだった。いつもは、つい、映像に込められている情報にまかせて説明をはしょってしまうところを、この日は、所作のひとつひとつをなるべく言語化して説明しようと務めた。この作業を通して、自分がいかに、所作の細かいところをこれまで意識せずに見てきたかということを感じさせられることになった。

また、「視線」「視点」といった、ジェスチャー研究に頻出する用語についても、再考を迫られた。人が頭を動かしているのを見ると、つい、あああの方は、視線を移動させようとして頭を動かしたのだな、と合点してしまいがちになる。しかし、頭を動かすということは、聴覚の範囲を変えることでもあるし、首をひねったり体の向きを変えることで、自分の内的な感覚を変化させることでもある。頭を動かす=見る、という図式を捉え直さね

ばならない、と用意したビデオを見ながら改めて考えた。

事前に用意した「観察者視点／キャラクタ視点」という用語も、そもそも「視点」ということばを構成しているのはどんな身体なのか、というところからもう一度考え直すことになった。

というわけで、発表しに行ったつもりが、どちらかという自分の勉強になった、というのが正直なところである。(細馬)

講師略歴

細馬宏通(ほそま・ひろみち／滋賀県立大学・准教授)

1960年西宮市生まれ。京都大学大学院理学研究科博士課程修了(理学博士:動物学)。現在、滋賀県立大学人間文化学部人間関係学科准教授。専門:コミュニケーション論、メディア史。著書に、篠原和子・片岡邦好編『ことば・空間・身体』(ひつじ書房/共著)、串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話(文と発話 第一巻)』(ひつじ書房/共著)、『絵はがきの時代』(青土社)ほか。

□発題2: 広瀬浩二郎(国立民族学博物館)

『手学問のすゝめ』の誕生: "さわる"体験型ワークショップがめざすフリーバリア社会」

2007年10月、慶應大学において「手学問のすゝめ」ワークショップが開催された。1987年に点字受験を拒否された全盲の私が、20年経って講師という立場で慶應に関わることができたのは、日本社会のバリアフリー化を示すエピソードといえよう。個人的にも社会的にも有意義だった慶應ワークショップから1年余、私は各地で“さわる”体験型ワークショップを企画、実施している。本発表では「手学問」のキーコンセプトである三つの“こう”(考・交・耕)について概説し、「さわる文化=触文化」の意義を確認した。

自己の体験のみならず、琵琶法師・イタコなどに関するフィールドワークに立脚し、視覚障害者を「視覚を使えない弱者」とするのではなく、「視覚を使わないユニークな五感活用者」としてとらえるのが私の生き方、研究の基本スタンスである。本発表では私が書いた「触常者宣言」を紹介し、触文化が視覚優位の現代社会にどのようなインパクトを与えるのか、参加者のみなさんと議論した。触覚情報に依拠する「手学問」の確立、五感の可能性を開拓する研究をめざす私にとって、さまざまな立場からのコメントを頂戴できたことは、じつに有益だった。

なお、2009年は点字の考案者、ルイ・ブライユの生誕200年である。ブライユは単なる視覚障害者用の文字の探究というのみでなく、触文化の価値、マイノリティの独自のライフスタイルを発見した先達ともいえる。そんなブライユの業績に学びつつ、本研究会の成果も生かして、触文化、手学問などの概念を整理した拙著『さわる文化への招待』を2009年春に刊行する予定である。(広瀬)

キーワード

見常者／触常者、バリアフリー／フリーバリア、手学問、触文化、点字

講師略歴

広瀬浩二郎(ひろせ・こうじろう／国立民族学博物館・准教授)

1967年、東京都生まれ。13歳の時に失明。筑波大学附属盲学校から京都大学に進学。2000年、同大学院にて文学博士号取得。専門は日本宗教史、障害者文化論。2001年より国立民族学博物館に勤務。06年3月～9月、民博において企画展「さわる文字、さわる世界——触文化が創りだすユニバーサル・ミュージアム」を担当。現在は「触文化」「フリーバリア」などをキーワードとしつつ、「さわる」ことをテーマとする講演、ワークショップを各地で行なっている。主な著書に『障害者の宗教民俗学』（明石書店、1997年）、『触る門には福来たる——座頭市流フィールドワーカーが行く！』（岩波書店、2004年）などがある。また編著書として昨年刊行した『だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム——"つくる"と"ひらく"の現場から』（読書工房）では、ミュージアムのバリアフリーという枠を超えて、新たな障害者像、博物館イメージを提案している。

以上